

東播支部

with コロナ時代になり、感染対策をしながら「まちの保健室」活動を続けてきました。

今年度は、ほとんどの拠点・出前隊も活動を再開することができました。また、東播支部の「まちの保健室」研修会も開催できました。

兵庫県立大学地域ケア開発研究所

ウィズコロナ時代の地域づくりと ICT 利活用～新時代の「まちの保健室」でできること～

本研修会は、現地と WEB と併用開催であった。神戸大学 龍野洋慶 氏から、在宅要介護者らにリストバンド型活動量計を用いた研究、COVID19 拡大下における施設入所者の遠隔面接と、こころのありように関する調査の紹介がありました。

「まさか、このようにテレビでお話できるとは、息子を見ながら、そんなことを今まで考えたことが無かったからね。それは嬉しい、嬉しいよりもびっくりしましたね」という入所者の言葉や、遠隔面会を導入する際の「率直な思いはやってみないと本当にわからない、何事も最初からやらずにするよりやってみてどうかです。利用者様がどう思われるのか、どう変わるのか、それはもう私らの気持ちではなくて」という言葉が印象的でした。

また、ICT 活用による～医療職協働～オンライン「通いの場づくり」への期待として、兵庫県立大学地域ケア開発研究所 林 氏からの講義がありました。



(兵庫県立大学地域ケア開発研究所：令和4年9月3日)

西明石サポーターリングファミリー

「西明石サポーターリングファミリー」は、このコロナ禍でも高齢者の方々に積極的に集まり活動されておられた中で、「まちの保健室」は新型コロナウイルス感染症の影響で休止していましたが、今年度より拠点活動を再開させていただくようになりました。毎月ふれあい会食と言われる、お食事会で集まりをされているところに、体組成測定と健康相談を実施しました。集まられている高齢者の皆様は、健康には全く気を付けておられる人ばかりで健康相談など無いよう思いましたが、「まちの保健室」として行かせて貰うと、健康に関する相談をうけました。今後も、感染対策をして気軽に健康相談をしてもらえるようにしていきたいです。

江井島総合市場

「江井島総合市場 憩うところ」では、出前隊として骨密度測定、健康相談を行いました。食事や運動習慣について伺いましたが、来所される方のお悩みは、健康面以外に生活面において「誰かに聞いて欲しいが話せる人がいない」と、一人で悩みを抱えておられる方が来られました。お話を傾聴することで「話をきいてもらってスッキリした」と、笑顔で帰られる方、この活動がきっかけとなり福祉に繋がった方もおられました。外に出て誰かに話を聞いてもらうきっかけにもなっているようです。



ほくたん

2年ぶりに再開となった「ほくたん」は、小地域福祉活動の一環として社会福祉協議会の方と共に開催しています。以前より参加者に健康手帳を配布しており、今回の再開で、リピーターの皆さまがその手帳を持ってきてくれたことに、ここでの「まちの保健室」活動が必要とされていることを実感することができました。その手帳には日常生活で困ったこと、健康相談等が個別に記載されています。ある参加者の方が、健康手帳を持って受診された際に医師より「健康手帳が診察の参考になった」と声を掛けてくださいました。健康手帳はこのような場面で活用される大事な役割を担っていると感じました。



今後も地域住民の健康増進・維持のサポートができるよう活動していきたいと思えます。